

Janmadin kī Jay Jay!

ジャンマディン・キー・ジェイ・ジェイ!

グルマーイの誕生日のお祝いの報告
シュリー・ムクターナンダ・アーシュラム
2016年6月23-30日

第10部

神のために踊る ダイアン・マッキンタイア

嬉しいことに、グルマーイの誕生日のお祝い——「ジャンマディン・キー・ジェイ・ジェイ!」——は継続し、6月25日にもサツツアングが行われました。シュリー・ニーラーヤに入ると、ホール的一方が踊りのための舞台になっていて、舞台の隣には、シヴァ・ナタラージャのムールティ(像)が置かれていました。

私が自分の席へと向かっていた時、ニディ・チョークの方からグルマーイの笑い声が聞こえてきて、それからシュリー・ニーラーヤの入り口に掛かっている大きな一連の鐘の音が響いてきました。後で知ったのですが、グルマーイはその前に、アートマ・ニディの外の芝生の所にあるシヴァ・ナタラージャのムールティを訪れ、敬意をささげていたそうです。今日のお祝いは、明らかに宇宙の踊り手の足元から始まっていたのでした。

私たち全員は、グルマールがホールに入り、そして席に着くまで立っていました。二人の司会者、マリカ・マクスウェルとラディカ・リシャンスキーが、グルマールを歓迎し、彼らの呼び掛けで、全員で大きな声で「ジャンマディン・キー・ジェイ・ジェイ!」と言いました。

マリカとラディカは自己紹介をし、マリカが、二人は12歳の時からシッダ・ヨーガの教えと学びのイベントの司会者をしてきたことを話しました。私はこの話を聞いてほほ笑みました。何年も前、私がライブ・イベント部門でセーヴァーをしていた時、マリカとラディカがまだ10代の初めの頃に、私はサツァングの司会をする彼らをコーチしたのです。今では大人になり、このセーヴァーをととても落ち着いてやすやすとささげている彼らの姿を見て、大変嬉しく思いました。

参加者全員を歓迎した後、マリカとラディカはバージニア州からの訪問セーヴァイト、スーザン・フォスターを紹介しました。彼らはスーザンを招いて、前に来て夫のマークと二人でグルマールの誕生日のお祝いにグルマールにささげた贈り物について話すように言いました。その贈り物は、大きくて驚くほど詳細な満月の写真でした。マークが自宅の天文台で、2015年のグループルニマーの夜に撮影したものでした。

スーザンは、マークと一緒にグルマールに書いた手紙を読みました。マークが複雑な過程を経てこの写真を完成させたことを語ったものです。彼は、96枚に分けて月の画像を撮りました。数カ月間かけて、注意深く一枚一枚を完璧につなぎ合わせて金属板にその写真を印刷し、可能な限り鮮明になるようにしたのです。

スーザンは、満月はマークにとって特別に意味のあることだと言いました。なぜなら、彼は 30 年前の 1986 年 6 月 21 日、夏至の満月の日に、グルマールからシャクティパートの伝授を受けたからです。「マークは、その日の夜に壮大な満月がシュリー・ムクターナンダ・アーシュラムの上に昇っていたのを決して忘れない、まるで生まれて初めて月を見たようだったと言います。計り知れない、信じられないような恩恵という贈り物の象徴です。ありがとう、ありがとう、ありがとうございます！ 愛を込めて、スーザンとマークより」と、スーザンは読み上げました。

その精緻な写真をじっと見て、スーザンが美しい手紙を読むのを聞き、私は、自らのグルを見つけ恩恵を受け取ったことへのこの弟子の深い感謝は、私たち皆も良く理解でき、そして心から共感できることだ、と感じました。

そして司会者は、ラーヴァンヤ・マヴィリパリによる二つの踊りが披露されると紹介しました。私は、去年のグルマールの誕生日のお祝いにラーヴァンヤが美しい踊りをささげたことを、シッダ・ヨーガの道のウェブサイトで読んだのを思い出しました。

今年もまた彼女が踊ると知って私はとても嬉しく、期待でわくわくしました。3歳の頃から、ラーヴァンヤは、バーラタナーティヤム舞踊の生徒として修行を重ねてきました。それは南インドの古典的な芸術形式で、動きを通して深い精神的な真理を伝えるものとして知られています。

司会者たちは、ラーヴァンヤの夫のアーディティヤを、踊りの紹介をしてもらうために招きました。

アーディテャは、ラーヴァンヤの母親と父親が彼女の生涯を通じての指導者かつ踊りの先生であり、これから鑑賞するのは、ラーヴァンヤの父親が振り付けし、作曲も手掛けた作品であることを説明しました。

アーディテャは、ラーヴァンヤの最初の踊りは「シヴァ・ストゥティ」という題名であると言いました。それは、シヴァ神についての「デヤーナ・シュローカ」という詩を基にした踊りです。ラーヴァンヤは、シヴァ神の畏敬の念を起こさせる壮麗さと、シヴァ神が宇宙のすべての原子に遍在するさまを表現します。

それからアーディテャは、8歳の息子を紹介しました。彼は、ムドラー、すなわち手の動きによってその意味を語りながら、「シヴァ・デヤーナ・シュローカ」を朗唱しました。彼は母親からムドラーを学び、同様に母親はその両親から学んだのです。3世代にわたって伝えられてきたこの伝統的な芸術と崇拝の形を、この小さな少年が執り行う姿を見るのは素晴らしいことでした。

この「シヴァ・デヤーナ・シュローカ」は語ります。

この全宇宙が彼の体であり、
あらゆる言語と文学が彼の言葉であり、
月と星々が彼の装身具である——
そのような者、崇高なシヴァに、私たちは頭を垂れます。

息子が演じた後、ラーヴァンヤは踊り始めました。彼女は、バラの花びらをシヴァ・ナタラージャにささげました。その花びらはシヴァ神の足元にひらひらと舞い落ち、まるで花びらも踊っているかのようでした。一つ一つのラーヴァンヤの動きによって、私たちはシヴァ神の神聖な踊りを体験することができました。私たちは

シヴァ神の偉大な喜びと至福に魅了されていました——踊りがささげられた存在、そして踊りに靈感を与えた存在に。私は、ラーヴァンヤが彼女の細胞の一つ一つを使ってグルのために踊り、神のために踊っていると感じました。この卓越した演技が終わる頃には、多くの参加者の注意は内側へと、それぞれの内側にある神の存在へと引き込まれたようでした。

アーディテャは、次に二つ目の踊りについて語りました。ラーヴァンヤは、バジヤンの「マイヤー・モーリ」という、いたずら好きで愛らしいバーラ・クリシュナ、すなわち赤ん坊のクリシュナの話を演じます。聖人スルダスによって書かれたこのバジヤンは、クリシュナ神と母のヤショーダの優しいやり取りを描いています。母親は、顔中をバターで汚し、壊れたバターの入れ物を持ったクリシュナ神を捕まえます。それでもなおシュリー・クリシュナは、こう言い張ります。

“Maiyya Mori meinayhee makhān Khaayo!”

「お母さん、僕はバターを食べていないよ！」

アーディテャが物語を話している時に、ラーヴァンヤは、踊りの中で演じる際のいろいろな身振りを演じて見せてくれました。「ヤショーダはクリシュナの言い分を少しも聞き入れなかったので、とうとうクリシュナ神は、母親に棒を渡して言いました。『さあどうぞ、お母さん。僕を信じないならお仕置きしていいよ』」

「それが母親の心を解かしました。そして幼子を抱き締めて言いました。『まあ、坊や、もう、あなたを信じるわ。バターを食べなかったのね！ *Tu nahin makhān khayō !*』」

「いたずらっぽくにやりと笑いながら、クリシュナが言いました。
『*Maiyya Mori meinayhee makhani Khaayo!* 本当はね、僕がバターを食べちゃったんだ!』」

ラーヴァンヤは舞台に出ました。この愉快的物語を素晴らしく上手に描写しました。最初にヤショーダになって、母の我が子への深い愛情を、お仕置きのものでさえも、伝えました。次にラーヴァンヤは、クリシュナ神になって、子どもの愛らしいいたずらを演じて見せました。この舞踊家は、クリシュナ神とヤショーダの間を行ったり来たりして二役を具体的に表現し、動きと表情の豊かさを通して二人の絶妙なやり取りを展開させました。ラーヴァンヤは、私たちに魅了し続けました。

演技が終わると、グルマーイは拍手を送り、皆も一斉に立ち上がってラーヴァンヤに拍手喝采を送りました。私自身も舞踊家であり振付師でもあるので、ラーヴァンヤが、技術の熟達とはどういうものであるのかを、たった今、見せてくれたのだとわかりました。

彼女の踊りを目の当たりにすることができたことを、私は光栄に感じました。彼女は驚くべき献身の心で踊り、そして、その技術は卓越していました。一つ一つの動き、身振り、目の瞬き、首を傾げるやり方は、彼女が演じる役になり切っていることを表していました。彼女は舞踊家であると同時に役者でもありました。彼女の演技は堂々としていて、見る者をわくわくとさせました。踊りの後で、司会者たちはラーヴァンヤの家族を舞台に招きました。グルマーイに代わってマンジュ・ディーディー・コーチャルと私は贈り物を持って前に出ました。マンジュ・ディーディーはラーヴァンヤにショールを、私は花輪と花束を贈りました。

グルマーイがラーヴァンヤ、アーディテヤ、そして彼らの息子にほほ笑みました。「素晴らしい踊り、素晴らしい朗読、素晴らしい演技でした。本当にたくさんの愛と、たくさんの献身がありました。そして、私たちはシヴァ神を礼拝し、クリシュナ神を礼拝しました。それで、シュリー・ラーマ神はどう感じているのでしょうか」と言って笑い、ミュージシャンの一団の方を向きました。グルマーイの合図で、ミュージシャンたちが「シュリー・ラーム、ジェイ・ラーム」をマルカウンス・ラーガで演奏し始めました。そのチャンティングは、盛り上がり、荘厳で感動するものでした。それは、勇敢で高潔で永遠に慈悲深いラーマ神にぴったりな賛歌でした。

ナーマサンキールタナが最高潮に達して終わった時、私たちは「ジョータ・セー・ジョータ・ジャガーオー」を歌うために立ち上がりました。アーラティーの後、グルマーイは、「熱意！ 力強いアーラティーでした」と言って笑いました。「ラーヴァンヤ、あなたは本当にたくさんの熱意をシュリー・ニーラーヤに持って来ましたね」

グルマーイはラーヴァンヤに、彼女の両親について、彼らが果たした教師としての役割について話すように言いました。崇拝の方法としての古典舞踊に対する愛情は、家族の中でとても強いものであったこと、そのために、彼女の両親はインドの文化親善大使として世界を旅していたことを、ラーヴァンヤは話しました。彼らはインド舞踊の芸術に一生をささげたのです。ラーヴァンヤは、「私は一人の踊り手としてよく両親と旅したものです。それ以来長い間踊り続けてきました」と言いました。そして、彼女はグルマーイにお辞儀をして、手を胸に当てて言いました。「グルマーイ、私は舞台上でたくさん踊ってきましたが、ここで踊るときは、違うのです。ここでは、グルマーイ、あなたが踊ります。私ではありません」

グルマーイはラーヴァンヤに言いました。「昨日、あなたがアーラティーをささげている時、とても見事でした。たくさんの愛、感謝、そして優しさ、まるですべての美德が生き生きとしているようでした。私はそれがとても好きでした」

大きな笑顔で、グルマーイは、「最高の誕生日でした！」と言いました。しばらくの間、最も甘美な静けさがあり、その後にグルマーイは、私たち全員に教えと導きを与える話をしました。私たちはじっと聞き入りました。

サツァングが終わろうとしている時、グルマーイは言いました。「明日は、『シュリー・グル・ギター』の朗唱がバガヴァーン・ニッテャーナンダ・テンプルにあります。そして、スワーミ・イーシュワラーナンダから特別なお知らせがあります」

すると、私たちにとってとても嬉しいことに、グルマーイはミュージシャンの一団に向かって声を掛けました。「ジャンガル、ジャンガル！」動揺することもなく、ミュージシャンの一団はグルマーイの作曲によるカッワーリ、「ジャンガル・ジャンガル・フィル・ディーワーネー」を演奏し始めました。

間もなく、ホールの皆もグルマーイに加わり、神を夢中で愛する人の陶醉についての歌を歌いました。このカッワーリは、私たちのことを言っているのだと感じました——このホールの中で、生き生きとした神への踊りをたった今見た参加者、そして世界中でグルマーイの誕生日を祝っているシッダ・ヨーギたちのことであると。ジャンマディン・キー・ジェイ・ジェイ! 私たちの最愛のグルマーイの誕生日に栄光あれ!

次に続く...